

御成敗式目證註

全

73
6764



門 3
號 6764
卷

高井蘭山翁講釋

證 註
御成敗式目

東都書林 玉巖堂梓

昭和八年十月十九日
兼藤榮氏贈

御成敗式目詳解自叙



士を主に仕て政治を補。農民を念とて出
て貴賤と差を以て工匠の宮殿城郭より茅屋蓬舎
まで造り出し居とあり。高賈を交易
朝暮の國用迄を辨し。億兆の人福に於て
出で天地ふ參り。善為の化育を施し。衆と
衆を以て安堵を得。孟子に云く。治る者人ふを以

而人と治る、唯壹人ありて成敗萬機其精神と
 勞し、其の耕業の力と勞するに増え、往時平泰時
 回列小議して政勢の移と定む。是を以て太平治る候
 年。殿后時と兵小解、變じありて其目を替れり。大綱を
 千萬年に易ふ。於是詳解を述て兒孫小文と云
 文政戊子春分

高井蘭山書



御成敗式目
詳解

御成敗式目詳解

東武 高井蘭山翁書

世と知し、身君、善事とさす者、成敗し、め
 悪事とさすもの、打敗て逐し、めざる由、成敗の
 一名と成敗とさす。罪一殺すと成敗とさす。一
 此也。式といは法度、目といは條目也。條、倉、實、物、の
 此、目、此、條、公、武、の、時、此、權、此、條、奉、時、此、定、元
 と、條、い、定、る、和、貞、永、元、年、壬、辰、八、月、は、法、と、定、て
 天下と平くに治る也

一可修理神
社專祭祀事

一可修理神社專祭祀事

日平の神、周れ、れ、身一、小、神、の、大、事、と、出、す。法、神、の、や
 しろ、小、修、理、と、さ、す。時、の、條、と、定、む。此、條、之、一。

右神者依入之敬增威人者依神之德添運

然則恒例之祭祀不致陵夷如在之礼奠莫令怠慢

例理いとまるとまひるは破換の如と修儀するに

右神者依入之敬增威人者依神之德添運

右の神は祭祀の業とて云ふ人々其敬はれぬが神の威勢もつゝある人々も神徳に生かして運

然則恒例之祭祀不致陵夷如在之礼奠莫令怠慢

此の恒例定りある祭祀は夷まらざるに礼奠も神の如く小立がめく潔淨なりて供へ怠慢へくずす

因茲於關東御分國七并庄園者地頭神主等各存其趣可致精誠也

因茲於關東御分國七并庄園者地頭神主等各存其趣可致精誠也

此の趣は東武より下流に法をもち小村黒石志ある地頭其の神社の事と司神主らに其趣を承知して精誠とて供へし庄園は各村と云

兼又致有封

兼又致有封社主任代

社者任代しやうはにだいにんと
符小破之時ふひちやうはのとき
且加修理若またかしてうりしやう
及大破言上およひちやうはをいひあげ
子細隨其左こまごまにそのひだり
右可有其沙汰みぎにはそのしあいた
矣なり

一可修造寺ひとすゝぞうじ

符小破之時且加修理若
及大破言上子細隨其左
右可有其沙汰矣

有もの社の知れと附あつてそのついでとすり候は
ある事も社に破壊せむる事なきにきり候はとすり候は
の書札に代へ改改し候はとすり候はとすり候は
候後と加ふ。大破も候はとすり候はとすり候は
上へそしあひ候はとすり候はとすり候はとすり候は
といふものと申す候はとすり候はとすり候はとすり候は
府よりていふ事なり

一可修造寺塔勤行佛事ひとすゝぞうじたうきんぎやうぶつじ

塔勤行佛事たうきんぎやうぶつじ

小事せうじ

堂塔の修造と候はとすり候はとすり候はとすり候は
職ありとあるべしとすり候はとすり候はとすり候は
れといふ候はとすり候はとすり候はとすり候は

右寺社雖異みぎのじやうしゃたがひな
崇敬惟同仍そのあやぶみただはなはた
修造之功恒しやうぞうのこうとこ
例勘宜准先れいかんぎやうしんせん
條莫招後勘じやうもくしやうあつちのり

右寺社雖異崇敬惟同仍
修造之功恒例勘宜准先
條莫招後勘

寺と社とは社といふ候はとすり候はとすり候はとすり候は
破壊と修造り候はとすり候はとすり候はとすり候は
條といふ候はとすり候はとすり候はとすり候は
初め候はとすり候はとすり候はとすり候はとすり候は

但恣貪寺用

但恣貪寺用

於不勤其役

之輩者早可

矣

但恣貪寺用お不勤其役
之輩者早可
令改易彼職
矣

寺の收納のちの任用は充てんと役僧の私工と費し
お勢と急ぐに位も職と改易他人と申付べしなり

一諸國守護
人奉行事

一諸國守護人奉行事

そのまじつり事と司りむるは後人と云そ事とを
めんとなりとそそ心けと本るう条と云し

御時取被定

置者大番催

促謀叛殺害

人付夜討強盜
山賊海賊

等事也

御時取被定
置者大番催
促謀叛殺害
人付夜討強盜
山賊海賊
等事也

而至近年者

右大將朝に内侍法皇のち後人沙汰すことと定むる
そいぬくの武士盡りふ在系してたの勢固と物むる
が上系至深や後候一保報人搦捕人と殺害する
ハ刑と加へ衆人の完し付入付室と採むるを強盜と云す
族ハ賊又船と何ハ海捕とと捕罪をいふの徳さんや
の責めを後人すりもよけと心けてそ條のこい好と云す
うしむるなり

而至近年者

分補代官於

郡郷宛課公

而至近年者分補代官於
郡郷宛課公

可加催

早任大將家
御時例大番
役并謀叛殺
害之外可令
停止守護之
沙汰

若背此式目
相交自餘事
者或依國司

領家之訴詔
或就地頭土
民愁鬱非法
之至為顯然
者被改所帶
之職可補穩
便之輩也又
至代官可定
一人也

一同守護人

一切許言すまゝに一切の事は
對捍の款當とすべし

早任大將家御時例大番
役并謀叛殺害之外可令
停止守護之沙汰

先例の如く大番の役位及び謀叛人殺害人とすば禁ぜず
若くは防卒とすば後占年とすべし此の條止べしとありまゝに
念比し禁めぬもの

若背此式目
相交自餘事
者或依國司

或就地頭土
民愁鬱非法
之至為顯然
者被改所帶
之職可補穩
便之輩也又
至代官可定
一人也

一同守護人不申更由没

不申更由没
收罪科跡事

右重犯之輩
出来時者須
申子細隨左
右之處不決
實否不糾輕
重恣称罪科
之跡私令没
収之條理不
盡之沙汰甚

自由之新謀
也早注進其
旨宜令蒙裁
斷猶以逮犯
者可被延罪
科

次犯科人田
畠在家并妻
子資財事

收罪科跡事

右重犯之輩出来時者須申子細隨左

右重犯之輩出来時者須
申子細隨左右之處不決
實否不糾輕重恣称罪科
之跡私令没収之條理不
盡之沙汰甚也早注進其
旨宜令蒙裁斷猶以逮犯
者可被延罪科

新於以逮犯者下公私罪科

係較と企て人と殺すを重罪と犯す事あり。その由と
つらとや上との由あり。階之より其後より其後より其後より
定む。罪の重き重きも此の如し。科人の
由と私よりあり。理と其より。家長の位形をなす
自他新し。係する。右の人先より其年の由と係する
の裁めを重き罪とゆへに。於け候と違ひ犯さば。後
此法と犯し。罪より其より。いし。あり。

次犯科人田畠在家并妻
子資財事

於重科輩者
雖名渡守護
所到田宅妻
子雜具者不
及付渡

兼又同類事
緞雖載白狀
無財物者更
非汰汰限

一諸國地頭
令抑留年貢
所當事

右抑留年貢
之由有本所
之訴訟者即
遂結解可請

於重科輩者
雖名渡守護
所到田宅妻
子雜具者不
及付渡

兼又同類事
緞雖載白狀
無財物者更
非汰汰限

一諸國地頭
令抑留年貢
所當事

右抑留年貢
之由有本所
之訴訟者即
遂結解可請

科と犯する人の所持する田畠を家妻の子供具材をその
こづけやうと家の次は云々資いふするに例日用のた具と云

重科人としてその渡の方へ渡るといふは田宅妻
法及具と付渡さざるの裁許と爲るべし

是は盜賊味の本と云々科人の白状と同類事として是は
すべし奈集掾の辨物するに於ては是は是は是は是は是は是は

時宜は依て斗六と云々白状は是は是は是は是は是は是は
とするは白状は是は是は是は是は是は是は是は是は是は

は田より年貢は是は是は是は是は是は是は是は是は是は
年貢不為と抑留と之後世は是は是は是は是は是は是は

勘定犯用之
条若無所道
者任員數可
辯償之

者任員數可辯償之

強金の時代より大名十萬貫と限られ、服家とも本取とも
稱し、その先より地取を以てそれ、領りの山村と治む、後世代
のよりけ、故より地取本取の年貢と引換し、ついに和南と
ゆの、結解は、あてと算用する、勘定といふ、未と色とと、
定ると、地取年貢と押算する、本取より、所取あり、本取
の代取と地取と算用する、もと勘定と地取及の引換、
さうの、うら、わ、る、い、そ、負、數、と、毎、償、を、返、す、べ、し、け、代、代、の
代取、服家の名代、地取と、後、半と、半、の、大、名、を、
二、三、三、三、と、後、半、の、本、取、と、治、め、本、取、の、必、重、長、と、
も、後、で、む、け、た、り、公、用、を、返、す、べ、し、引、換、を、
返、す、是、と、も、後、代、と、名、取、邑、地、取、あり、代、取、あり、て、本、取、の、法、を、
お、も、れ、の、本、取、と、治、め、民、と、返、す、後、世、とい、大、上、様、取、の、う、ら、る、と、

但於為少分

但於為少分

者早速可致
沙汰到過分
者三箇年中
可辯濟也猶
背此旨令難
溢者可被改
取職也

沙汰到過分
者三箇年中
可辯濟也
猶背此旨令難
溢者可被改
取職也

一國司領家
成敗不及開
東御口入事

一國司領家成敗不及開 東御口入事

小司、一、司、の、つ、つ、と、成、敗、の、お、か、の、そ、の、和、と、四、本、知、り、一、本、の、二、本、
も、成、敗、の、始、も、と、と、く、仕、立、改、替、之、實、本、の、境、念、と、云、り、

右國衙庄園
神社佛寺為
本所進止於
沙汰來者今
更不及御口
入若雖有申
旨敢不能叙
用

右國の定まり東のむくの惣名之仕來りまを國東武持の
此口入ぬる條と云

右國衙庄園神社佛寺為
本所進止於沙汰來者今
更不及御口入若雖有申
旨敢不能叙用

右國衙庄園の最る和府中之衙役所と云ぬ一底軍といふ
あつて除地せしむる所之目も備もいろはなる所之神社仏寺
の叙取本所のを退しそらひ來る所今も此口入る所
かく定られ其の上にも御まらる所と云ふる所ありしもこれ
あては件言あるべし守叙用とい地より中名と叙用と云は
檢の上よりまらる所之叙取本所を沙汰來る所といふ所
を止るを退し同く

次不帶本所
舉狀致越訴
事

諸國庄園并
神社佛寺領
以本所舉狀
可經訴訟之

次不帶本所舉狀致越訴
事

能くあるもの御取しり筆並の狀と云ひぬて御所定法
也。まらるるを件すと云はれしを禁制する所の世も御まらる
今の世より和の支配の條考らるると云はれしと云ふ同

諸國庄園并神社佛寺領
以本所舉狀可經訴訟之

處不帶其狀者既背道理歎自今以後不及成敗

一右大將家以後代七將軍并二位殿御時所宛給所領等依本主訴訟被改補否事

於自今以後不及成敗

此處不帶其狀者既背道理歎自今以後不及成敗

一右大將家以後代七將軍并二位殿御時所宛給所領等依本主訴訟被改補否事

右大將家以後代七將軍并二位殿御時所宛給所領等依本主訴訟被改補否事

右或募勳功之賞或依官仕之勞拜領之事非無由緒

而稱先祖之

右或募勳功之賞或依官仕之勞拜領之事非無由緒

而稱先祖之本願投象哉

右或募勳功之賞或依官仕之勞拜領之事非無由緒

本領於蒙裁許者一人綴雖開喜悅之眉傍輩定難成安堵之思歟監訴之輩可被停止

但當時給人有罪科之時本主守其次

企訴訟事不能禁制狀

次代七御成敗畢後擬申亂事

依無其理被弃置之輩歷歲月之後企

許者一人綴雖開喜悅之眉傍輩定難成安堵之思歟監訴之輩可被停止

但為時給人有罪科之時本主守其次

能禁制狀

次代七御成敗畢後擬申亂事

依無其理被弃置之輩歷歲月之後企

當時の給人といふ點は、依て今判し知り給ふるを、
依て罪と犯し、然ら有ることを、あはれ時根柢の知り、
て御成敗と企訴の判り

於此の次代七御成敗の畢後、
依て再い事と、
らんとす

訴訟之条存
知之旨罪科
不輕自今以
後不顧代と
之御成敗撰
致面と之監
訴者願以不
實之子細被
書載所帶之
證文

和らむ罪科不輕自今以
後不顧代と之御成敗撰
致面と之監訴者願以不
實之子細被書載所帶之
證文

天下の政をい何ぞも偏頗ありしや現成の向くは定まの
上御成敗の條をい何ぞも偏頗ありしや現成の向くは定まの
又も再御成敗の條をい何ぞも偏頗ありしや現成の向くは定まの
換んと企てたりしや現成の向くは定まの
御成敗の條をい何ぞも偏頗ありしや現成の向くは定まの
子細とて書載所帶之の證文とて書載所帶之の證文とて書載所帶之の證文

一雖帶御下
文不令知行
經年序取領
之事

一雖帶御下文不令知行
經年序取領之事

此の條は御成敗の條に依りて經年序取領の事とて書載所帶之の證文とて書載所帶之の證文とて書載所帶之の證文

右當知行之
後過二十箇
年者任右大
將家之例不
論理非不能

右當知行之後過二十箇
年者任右大將家之例不
論理非不能

改替

而申知行之
由掠給御下
文筆雖帶彼
狀不及叙用

一謀叛人更

右式目之趣
兼日難定款
且任先例且

依時儀可被
行之

一殺害刃傷
罪科事

右或依當座
之諍論或依
遊宴之醉狂

今知りし事志二十年来とありし事いふ改替するべし
右文お家の時々の例也

而申知行之由掠給御下
文筆雖帶彼狀不及叙用

多知りし事志二十年来とありし事いふ改替するべし
右文お家の時々の例也

一謀叛人更

依時儀可被行之

右式目之趣兼日難定款
且任先例且依時儀可被

行之

右式目之趣兼日難定款且任先例且依時儀可被
依時儀可被行之

一殺害刃傷罪科事

人殺害と刃とで一人は傷罪科の事也

右或依當座之諍論或依遊宴之醉狂

不慮之外若
犯殺害者其
身被行死罪
并被處遠流
雖被沒收所
帶其父其子
不相交者互
不可懸之

犯殺害者其身被行死罪
并被處遠流
雖被沒收所帶其父其子
不相交者互不可懸之

あつたいひあつたの律備御のこころよおころ。持身御宴の解
犯すりして死を懸くと殺害し。故に悔ふもせん。言は
そ科に依て商人の死罪又ハ流罪より知らぬ没収せし
とひてもその人の父も子も一知しわらざるを律に拘らざり
科と懸へるは除く不慮の外とある所のやいふるは
考りておろす。不慮とておひの命又ハ命の命と加つて
刑にせよ。いふの然父よりらざるは父の答へるも
刑人のいふはつべしとておろすはあつたはるる

次刃傷科事
同可准之

次刃傷科事同可准之

次或子或孫
於殺害父祖
之敵父祖緦
雖不相知可
被處其罪為
散父祖之憤
忽遂宿意之
故也

次或子或孫於殺害父祖
之敵父祖緦不相知可
被處其罪為散父祖之憤
忽遂宿意之故也

こころよおころ。持身御宴の解
犯すりして死を懸くと殺害し。故に悔ふもせん。言は
そ科に依て商人の死罪又ハ流罪より知らぬ没収せし
とひてもその人の父も子も一知しわらざるを律に拘らざり
科と懸へるは除く不慮の外とある所のやいふるは
考りておろす。不慮とておひの命又ハ命の命と加つて
刑にせよ。いふの然父よりらざるは父の答へるも
刑人のいふはつべしとておろすはあつたはるる

次其子若欲
奪入之所職
若為取人之
財寶雖企殺
害其父不知
之由在狀分
明者不可處
緣坐

一依夫罪科
妻女所領被
沒收否事

右於謀殺殺
害并山賊海
賊夜討強盜
等重科者可
懸夫咎也但
依當座口論
若及刃傷殺
害者不可懸

次其子若欲奪入之所職若為取人之財寶雖企殺害其父不知之由在狀分明者不可處緣坐

一依夫罪科妻女所領被沒收否事

罪科はつゝと妻女の所領の女もあつて別よ一は持するものよまの罪よつてこれら没収とてよるよつとや

右於謀殺殺害并山賊海賊夜討強盜等重科者可懸夫咎也但依當座口論若及刃傷殺害者不可懸

係殺殺害の賊海賊夜討強盜のこゝにわすれ出たりけり一はつとよわすれは妻とて知れりよつとや

一惡口答事

右圖殺之基
起自惡口其
重者被處流
罪其輕者可
被召籠也

問注之時吐

一惡口答事

右圖殺之基起自惡口其
重者被處流罪其輕者可
被召籠也

問注之時吐惡口則可被

付論於敵

惡口則可被
付論於敵
又論野之事
無其理者可
被沒收他野
領若無野帶
者可處流罪
也

又論野之事無其理者可
被沒收他野領若無野帶
者可處流罪也

又論野之事無其理者可
被沒收他野領若無野帶
者可處流罪也

科

但為扶代官
無咎之由主
人陳申之処
實犯露頭者
難遁其罪仍
可被沒收所
領至彼代官
者可被召禁
也

兼又代官或
抑雷本所之
年貢或違背
先例之率法
者雖為代官
之所行主人
可懸其科也

加之代官若
依本所之訴
詔若就訴入

科と犯すといふ人々捕(元)はさるる人々捕(元)はさるる

但為扶代官無咎之由主
人陳申之処實犯露頭者
難遁其罪仍可被沒收所
領至彼代官者可被召禁
也

刑と加へんといふとてり
代官の科令とてり
犯す罪科の向はるる人々の科令とてり
刑と加へんといふとてり

兼又代官或抑雷本所之
年貢或違背先例之率法
者雖為代官之所行主人
可懸其科也

率法といふは率法は法友之率と別へる代官
率法の由と抑雷と引合へる。又先例は率法の法友
と違背といふは代官の率法と違背といふは代官とてり
仕人一人も抑雷といふこととてり

加之代官若依本所之訴
詔若就訴入

執筆者又與同罪。次以論人所帶之證文為謀書之由多以稱之。披見之處若為謀書者。尤任先條可有其科。又無文書之訛謬者。仰謀畧之輩。可被付神社。

文為謀書之由多以稱之。披見之處若為謀書者。尤任先條可有其科。又無文書之訛謬者。仰謀畧之輩。可被付神社。

但到無力之輩者可被追放其身也。

佛寺之修理。但到無力之輩者可被追放其身也。

一兼久兵乱時沒收地事

佛寺之修理。但到無力之輩者可被追放其身也。

一兼久兵乱時沒收地事

八十二代之帝とほも相院と申。八十三代之帝と申。相院と申。八十四代之帝と申。相院と申。八十五代之帝と申。相院と申。八十六代之帝と申。相院と申。八十七代之帝と申。相院と申。八十八代之帝と申。相院と申。八十九代之帝と申。相院と申。九十代之帝と申。相院と申。九十一代之帝と申。相院と申。九十二代之帝と申。相院と申。九十三代之帝と申。相院と申。九十四代之帝と申。相院と申。九十五代之帝と申。相院と申。九十六代之帝と申。相院と申。九十七代之帝と申。相院と申。九十八代之帝と申。相院と申。九十九代之帝と申。相院と申。百代之帝と申。相院と申。

科殊重仍即
被誅其身被
沒收所帶畢
而依自然之
運道來之族
近年及聞食
者緯已逾期
之上尤就寬
宥之儀割所
領內可被沒
收五分一但
御家人之外

科殊重仍即
被誅其身被
沒收所帶畢
而依自然之
運道來之族
近年及聞食
者緯已逾期
之上尤就寬
宥之儀割所
領內可被沒
收五分一但
御家人之外

下司庄官之
輩京方之咎
緞雖露顯今
更不能改沙
汰之由去年
被議定畢者
不及異儀
次以同沒收
之地稱本領
主訴申事當
知行之人依

下司庄官之
輩京方之咎
緞雖露顯今
更不能改沙
汰之由去年
被議定畢者
不及異儀
次以同沒收
之地稱本領
主訴申事當
知行之人依

下司庄官之

緞雖露顯今
更不能改沙
汰之由去年
被議定畢者
不及異儀
次以同沒收
之地稱本領
主訴申事當
知行之人依

有其科沒收
之宛給勲功
之輩畢而彼
時知行者非
分之領主也
任相傳之道
理可返給之
由訴申之類
多有其聞既
就彼時知行
普被沒收畢
何閣當時之

有其科沒收之宛給勲功之輩畢而彼時知行者非分之領主也任相傳之道理可返給之由訴申之類多有其聞既就彼時知行普被沒收畢何閣當時之

領主可尋往
代之由緒哉
自今以後可
停止盤望矣

一同時合戰
罪科父子各
別事

右父者雖交
京方其子候
關東子者雖

兼之の礼よりあけられ... 知れぬ... 領主の... 罪科の... 別事の... 兼之の時の成敗... 親子... 科... 事...

一同時合戰罪科父子各別事

右父者雖交京方其子候關東子者雖

交京方其父
候關東之輩
賞罰已異罪
科何混

一西國住人
等雖為父雖
為子一人參
京方者住國
之父子不可
道其咎雖不

同道依令同
心也但行程
境遙音信難
通共不知子
細者互難被
處罪科款

一讓與所領
於女子後依
有不和儀其

候關東之輩賞罰已異罪
科何混

京方とて西國に居る人其父を殺すは恩賞あり。若し
を親子といへば其の咎は重し。然れども又京方
及び西國に在り

一西國住人未嘗為父雖
為子一人參
京方者住國
之父子不可
道其咎雖不
同道依令同
心也但行程
境遙音信難
通共不知子
細者互難被
處罪科款

同道依令同
心也但行程
境遙音信難
通共不知子
細者互難被
處罪科款

一讓與所領
於女子後依
有不和儀其

親悔返否事

不わい申したるは悔返すべしと云ふ事なり

右男女之号

右男女之号は後美父母之

雖異父母之

恩惟同法家之倫雖有甲

恩惟同法家

昔女子則憑

不悔返之文

不可憚不孝

之罪業父母

亦察及敵對

之論不可讓

亦察及敵對之論不可讓

亦於女子死

男子と女子と号は別れども親のいつくむべきは同じし法家は法度の事とつづるは知る事なり。此の事の申すは

所領於女子

歟

親子義絶之

親子義絶之起也既教令

起也既教令

違犯之基也

女子若有向

背之儀者父

母位任進退

之意依之女子

之意依之女

子者為全讓

狀竭至孝之

於撫育均慈親之恩を以て

節父母者為
施撫育均慈
愛之思者欵

親中事と違ひ親と違ふこと親の教令と親と違ふ
の事之は親の教令を違ふは親を侮むと云ふ一
親の作は違ひて違ひて違ひて違ひて違ひて
戒め呵り親の教令を違ふは親を侮むと云ふ
一 節父母者為 施撫育均慈 愛之思者欵
親の作は違ひて違ひて違ひて違ひて違ひて
戒め呵り親の教令を違ふは親を侮むと云ふ
一 節父母者為 施撫育均慈 愛之思者欵

一 不論親疎
被眷養輩遠
背本主子孫
事

右 憑入之輩
被親愛者如
子息不然又
如即從欵爰

一 不論親疎 亦眷養輩遠 背本主子孫 事

右 憑入之輩 被親愛者如 子息不然又 如即從欵爰

彼輩今致忠
勤之時本主
感歎其志之
餘或渡宛文
或與讓狀之
或稱和与之
物對論本主
子孫之條結
構之趣甚不
可然

感歎其志之條或渡宛文
或與讓狀之或稱和与之
物對論本主子孫之條結
構之趣甚不可然

人よ湯てまを執るて...
の恩の如く...
絶割つて...
と宛文と云...
謝す...
と...
十七

求媚之時者
且存子息之
儀且致郎徒
之礼向背之
後者或假他
人之号或成
敵對之思忽
忘先人之恩
顧

違背本主之
子孫者於得

求媚之時志思存子息之
儀且致郎徒之礼向背之
後者或假他人之号或成敵
對之思忽忘先人之恩顧
違背本主之子孫者於得

氣の...
の...
たつと...

讓之所領者
可被付本主
之子孫矣

一得讓狀後
其子先于父
母令死去跡
事

右其子雖令
見存到令悔
返者有何妨

哉况子孫死
去之後者只
可任父祖之
意也

一妻妾得夫
讓被離別後
領知彼所領
否事

右其妻依有
重科於被弃
捐者綴雖有

讓之所領者
可被付本主
之子孫矣

一得讓狀後
其子先于父
母令死去跡
事

右其子雖令
見存到令悔
返者有何妨

哉况子孫死
去之後者只
可任父祖之
意也

一妻妾得夫
讓被離別後
領知彼所領
否事

右其妻依有
重科於被弃
捐者綴雖有

思ふとさかりしつらかりし本道ののち孫は遠方への後を
つらかりしつらかりし本道ののち孫は遠方への後を

親存せの時つらかりし本道ののち孫は遠方への後を
つらかりしつらかりし本道ののち孫は遠方への後を

その子存せといふも悔は父祖の公は但て争ふて定めあり
つらかりしつらかりし本道ののち孫は遠方への後を

本妻妾の讓を故てハ其後綴縁せられたる。か
つらかりしつらかりし本道ののち孫は遠方への後を

往日之契狀
難知行前夫
之所領

又彼妻有功
無過賞新弃
舊者所讓之
所領不能悔
還

一父母所領
配分之時雖
非義絕不讓

與成人之子
息事

右其親以成
人之子令吹
舉之間勵勤
厚之思積勞
功之処或就
繼母之絶言
或依庶子鍾
愛其子雖不
被義絶忽漏

難知行前夫之所領

往の契状は難知行前夫の所領す。又彼妻は功ありて無過を賞せしむるに新に棄てしむるは舊の所領を譲りて之を領す。然るに舊の所領は已に彼妻の所領にして不可悔す。故に舊の所領は已に彼妻の所領にして不可悔す。故に舊の所領は已に彼妻の所領にして不可悔す。

又彼妻有功無過賞新弃
舊者所讓之所領不能悔
還

又彼妻は功ありて無過を賞せしむるに新に棄てしむるは舊の所領を譲りて之を領す。然るに舊の所領は已に彼妻の所領にして不可悔す。故に舊の所領は已に彼妻の所領にして不可悔す。故に舊の所領は已に彼妻の所領にして不可悔す。

一父母所領配分之時雖
非義絶不讓成人之子

息事

父母所領と配分する時。申すに遠くは成人の子は縁とある時のことなり。

右其親以成人之子令吹
舉之間勵勤厚之思積勞
功之処或就繼母之絶言
或依庶子鍾愛其子雖不
被義絶忽漏

彼處分佐際
之條非據之
至也

仍割今所立
之嫡子分以
五分一可宛
給無足之兄
也。但雖為少
分於斗死者
不論嫡庶立

依證跡抑雖
為嫡子無指
奉公又於不
孝之輩者非
沙汰限

一女人養子
事

右如法意者
雖不許之右
大將家御時

彼處分より上へ成成あぐる之佐際と八月がうもつり何
らすいへんもせんすべしとさるる如據はたすしうすし
もるる事しといふ親ふと成成してそのもも原の
とがと成成とつて御ふ佐の終そあつていへる成の
庶子と成成よりあつて養成もて成成人のみよへ
西成配子の成成とつて成成の成成といふ事

仍割今所立之嫡子分以
五分一可宛給無足之兄
也。但雖為少分於斗死者
不論嫡庶立

存之輩者非沙汰限

成人の嫡子よ少も成成するも八月後されば嫡子ふ立
子の知りのみふと割るる成成の嫡子よ成成するも
これいへる事しといふ事。親もつていあてがいて成成
あつて嫡子成成よりす。成成より知りて成成するも
成成より成成するも成成するも成成するも成成するも
成成より成成するも成成するも成成するも成成するも

一女人養子事

右代の女の成成よりす。成成より成成するも成成するも
成成より成成するも成成するも成成するも成成するも

右如法意者
雖不許之右
大將家御時

以來到于當世無其子之女人等讓与所領於養子事不易之法不可勝斗加之都鄙之例先蹤惟多評議之處尤足信用欵

世其子之女人亦讓与所領於養子事不易之法不可勝斗加之都鄙之例先蹤惟多評議之處尤足信用欵

法のむろり教のむろり時中て女の
みとやむい知りて後りあふる林とゆふこれ不易
の法とるり教けおも多くて勝斗とくうすそとた
まも難も先蹤惟多評議之處尤足信用欵
と乃ら女あ中教子ののり法のむろりすともり

一讓得夫所領後家令改嫁事

一讓得夫所領後家令改嫁事

右為後家之輩讓得夫所領者須抛他事訪夫之後世之處背式目事非無其咎欵而忽忘貞心令改嫁

右為後家之輩讓得夫所領者須抛他事訪夫之後世之處背式目事非無其咎欵而忽忘貞心令改嫁

まの所領と後りてる後家ありて他と如く再嫁する時男
のあつる知りてそのの知るる知るるのこころ

者以所得之
領知可宛給
凶夫之子息
若又無子息
者可有別御
計

一關東御家
人以月御雲
客為聳君依
讓所領公事
之足減少事

右於所領者
讓彼女子雖
令各別至公
事者隨其分
限可被省宛
也

親父存日緞
成優恕之儀
雖不宛課述

亡夫之子息若又無子息
者可有別御計

一關東御家
人以月御雲
客為聳君依
讓所領公事
之足減少事

右於所領者
讓彼女子雖
令各別至公
事者隨其分
限可被省宛
也

親父存日緞
成優恕之儀
雖不宛課述

夫が初め領受するは家内事務のつとめをその子の代りとして
とすべし武國とすむと再嫁するは然るも其のあつては
らば所領の亡夫のふりかへるべし。子のつとめは其の代り
あり。是れはたとひ其のあつては再嫁するも其のあつては
一關東御家
人以月御雲
客為聳君依
讓所領公事
之足減少事

とすべし武國とすむと再嫁するは然るも其のあつては
らば所領の亡夫のふりかへるべし。子のつとめは其の代り
あり。是れはたとひ其のあつては再嫁するも其のあつては
一關東御家
人以月御雲
客為聳君依
讓所領公事
之足減少事

去後者尤可
令催勤

若募推威不
勤仕者永可
被辞退件所
領款凡雖為
關東祇候之
女房敢勿泥
殿中平均之
公事此上猶

去後者尤可
令催勤

若募推威不勤仕者永可被辞退件所領款凡雖為關東祇候之女房敢勿泥殿中平均之公事此上猶
若募推威不勤仕者永可被辞退件所領款凡雖為關東祇候之女房敢勿泥殿中平均之公事此上猶
若募推威不勤仕者永可被辞退件所領款凡雖為關東祇候之女房敢勿泥殿中平均之公事此上猶
若募推威不勤仕者永可被辞退件所領款凡雖為關東祇候之女房敢勿泥殿中平均之公事此上猶

令難溢者不
可知行所領

一讓所領於
子息給安堵
御下文之後
悔還其領讓
與他子息事

右可任父母
之意之由具

檢威の檢への威よりゆるること及び節ごうハ所候と辭退して更ぬぐ。關東文任の局よりとも扇井武右衛門より早うよおし均しあてらるる役るれば滞り志なり泥むよわいてハそむつことあがりやうと。

一讓所領於子息給安堵御下文之後悔還其領讓與他子息事

親より我子よ知りて譲り。そまよあててお候の申判状と申渡すの候そを所候と相入。外の子よ譲て又お候の申判と申渡す候こと。

右可任父母之意之由具

載先條畢
仍就先判之
讓雖給安堵
御下文其親
悔返之於讓
他子息者任
後判之讓可
有御成敗

一未處分跡
事

右且隨奉公
之淺深且紀
器量之堪否
各任時宜可
被分宛

一構虛言致
讒訴事

右和面巧言

載先條畢仍就先判之
讓雖給安堵御下文其親
悔返之於讓他子息者任
後判之讓可有御成敗

一未處分跡

事

右且隨奉公之淺深且紀
器量之堪否各任時宜可
被分宛

一構虛言致讒訴事

右和面巧言

右和面巧言

之問參差之
沙汰不慮而
出来依於
訴人者暫可
被抑裁許至
執申人者可
有御禁制奉
行人若令緩
怠空經二十
箇日者於庭
中可申之

沙汰不慮而出
出来依於
訴人者暫可
被抑裁許至
執申人者可
有御禁制奉
行人若令緩
怠空經二十
箇日者於庭
中可申之

申人者暫可
被抑裁許至
執申人者可
有御禁制奉
行人若令緩
怠空經二十
箇日者於庭
中可申之

一遂問注輩
不相待御成
敗執進権門
書状事

一遂問注輩
不相待御成
敗執進権門
書状事

右預裁許者
悅強縁之力
被弃置者愁
権門威

右預裁許者
悦強縁之力
被弃置者愁
権門威

裁許の程
被弃置者愁
権門威

右依無其理
不關裁許之
輩為奉行入
偏頗之由構
申之條太以
監吹也自今
以後構出不
實企濫訴者
可被沒公取
領三分無取
帶者可被追
却

右依無其理不關裁許之
輩為奉行入偏頗之由構
申之條太以監吹也自今
以後構出不實企濫訴者
可被沒公取領三分無取
帶者可被追却

監吹といふよりさうことと云ふこと監訴もさうの御儀
申と云ふは彼人の没取と同く九上らうことと追却とい
かひいりぞけらうことと追却のことと已解りたること
と云ふの御願と實事ぬきことと構出のみらう御

若又奉行入
有其誤者永
不可被召仕

若又奉行入有其誤者永
不可被召仕

一隱置盜賊
惡黨於町領
内事

一隱置盜賊惡黨於町領
内事

右件輩雖有
風聞依不露

右件輩雖有風聞依不露

盜賊ハぬすびと惡黨ハあつことと云ふこと
しつこり

さうぶ御願三上らうことと云ふことと追却といふこと
うらうらうと云ふことと構出のみらう御

り美しき御願人の誤あらうことと云ふことと追却といふこと
と云ふことと構出のみらう御

顯不能斷罪
不加炳誠而
國人等差申
之處召上之
時者其國無
為也在國之
時者其國狼
藉也云々

仍於緣邊之
凶賊者付證
跡可召禁

又地頭等到
隱置賊徒者
可為同罪也
先就嫌疑之
趣召置地頭
於鎌倉彼國
不落居之間
者不可給身
暇

於不能斷罪不加炳誠而
國人等差申之處召上之時
者其國無為也在國之時者
其國狼藉也云々

仍於緣邊之凶賊者付證跡
可召禁

又地頭等到隱置賊徒者
可為同罪也先就嫌疑之
趣召置地頭於鎌倉彼國
不落居之間者不可給身
暇

地頭等に於て賊の徒と隠置候者ありければ同罪と
せらる。地頭の隠置候者毎れそは平時にせらるる間
免されず。又地頭の知りしや危の嫌疑ありしこと
由りてしるれば、賊徒ありしとせらる。知りしるべし。

海邊に於て地頭の隠置候者ありければ同罪とせらる。地頭の知りしや危の嫌疑ありしこと由りてしるれば、賊徒ありしとせらる。知りしるべし。

猶預之新議
哉

次放火人事
准據盜賊誣
令禁遏

一密懷他人
妻罪科事

右不論強姦

和姦懷抱人
妻之輩被召
所領半分可
被罷出仕無
所帶者可處
遠流也。女之
所領同可被
召之無所領
者又可被配
流之也

從嫁之新議哉

前云二種の無きは例罪一殺す法あれは從嫁之新議云々及之るは從嫁ハハと歎の事なり

次放火人事
准據盜賊誣
令禁遏

放火ハハ盜賊ニ准據同罪トスベシ人極刑向後ト禁遏ノ事アリ

一密懷他人妻罪科事

他のものとぬすむ罪科事

右不論強姦和姦懷抱人

妻之輩被召所領半分可被罷出仕無所帶者可處遠流也。女之所領同可被召之無所領者又可被配流之也

如の字へがらと強て犯すと云ふは合意して犯す。けま取と別。他の妻懷抱りの知り申と云ふは仕と云ふ。知り申と云ふは流さるべし。女も知り申と云ふは。知り申と云ふは。女の如しの事と云ふ。法姦ハ女と四罪申す。又あり。配流ハ流罪より男と女と別。流す事と云ふ。實より流刑と配流と云ふて流す事と云ふ。

台文事及三箇度不參決者訴人有理者直可被裁許訴人無理者又可給他人也

但到所從馬牛并雜物等者任負數被糾返可被付

寺社修理也

一改舊境致相論事

右或越往昔之境構新儀案妨之或掠近年之例捧古文書論之雖不預裁許

箇度不參決者訴人有理者直可被裁許訴人無理者又可給他人也

但到所從馬牛并雜物等者任負數被糾返可被付

一改舊境致相論事

右或越往昔之境構新儀案妨之或掠近年之例捧古文書論之雖不預裁許

併狀の趣より偏人として... 併狀の趣の理よりして宛らるる... 併狀の趣よりして宛らるる... 併狀の趣よりして宛らるる...

田畠又の... 山林... 併人... 併人... 併人... 併人...

無指損之故
猛惡之輩動
企謀訴成敗
之處非無其
煩

自今以後遣
實檢使紀明
本跡為非據
之訴訟者相

斗越境成論
之不限割分
訖人領知之
内可被付論
人之方也

一關東御家
人申京都望
補傍官所領
上司事

企謀訴成敗之處非無其煩

健音の徒と欲新等も業と以て此の例もあらず。あつて
の石の松をて候へども云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。
も一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。
係附のしありて候へども。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。
まづ候へども。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。

自今以後遣
實檢使紀明
本跡為非據
之訴訟者相

斗越境成論
之不限割分
訖人領知之
内可被付論
人之方也

自今以後遣實檢使とつり。本跡と紀明。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。
さ。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。
人の云々の内。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。
ま。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。
候へども。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。

一關東御家
人申京都望
補傍官所領
上司事

備文ハ傍官ノ申付ルルノ法ハ此ノ如ク。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。
案の傍官。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。一。云々。

右右大將家
之御時一向
被停止畢

而近年以降
企自由之望
非言背禁制
令單喧嘩歎
自今以後於
致監望輩者

可被占所領
一取也

一惣地頭押
妨所領内名
主職事

右給惣領之
人稱所領内
掠領各別村
事取行企難

右右大將家之御時一向被停止畢

右右大將家之御時一向
被停止畢

而近年以降企自由之望非言背禁制令單喧嘩歎自今以後於致監望輩者

而近年以降企自由之望
非言背禁制令單喧嘩歎
自今以後於致監望輩者

一惣地頭押妨所領内名
主職事

右給惣領之人稱所領内掠領各別村事取行企難

右給惣領之人稱所領内
掠領各別村事取行企難

道罪科爰給
 別御下文雖
 為名主職惣
 地頭若伺庭
 弱之隙有限
 沙汰之外巧
 非法致盤妨
 者可給別納
 御下文於名
 主也又寄事
 於左右不顧
 先例違背地

為名主職惣地頭若伺庭
 弱之隙有限沙汰之外巧
 非法致盤妨者可給別納
 御下文於名主也又寄事
 於左右不顧先例違背地
 改志可云改名主職也

惣地頭と稱する地頭はたゞ一郡の惣地頭の下に二ヶ村三ヶ村と稱するものあり又ハ古社の惣地頭も入交りてあり是れハ別ノ階下ノ文とありて稱すは時代の変りて弱之隙有限沙汰之外巧の語は別ノ階下ノ文とありて稱すは時代の変りてあり是れハ別ノ階下ノ文とありて稱すは時代の変りてあり

頭者可被改
 名主職也

一官爵所望
 之輩申請關
 東御一行事

一官爵所望之輩申請關東御一行事

東御一行事

惣地頭より進出すは我々も惣地頭の下に二ヶ村三ヶ村と稱するものあり又ハ古社の惣地頭も入交りてあり是れハ別ノ階下ノ文とありて稱すは時代の変りてあり是れハ別ノ階下ノ文とありて稱すは時代の変りてあり

右被召成功之時被注申
所望入者既
是公平也依
非沙汰之限
為昇進申舉
狀事不論貴
賤一向可停
止之

右に召成功之時に注申
所望入る者既に
公平に依り
沙汰の限を
越えず申上
る事不論貴
賤一向に停
止す

功と儀て及位とすむべしと。そのそり後とありて
及位と儀とすむべしと。始より及位とすむべしと
すむべしと。是れ其の心算なり。是れ其の心算なり
よめしむべしと。是れ其の心算なり。是れ其の心算なり
て私をてしむべしと。是れ其の心算なり。是れ其の心算なり
らすしむべしと。是れ其の心算なり。是れ其の心算なり

但申受領檢
非連使之輩
於為理運者
雖非御舉狀
只有御免之
由可被仰下
歟

但申受領檢非連使之輩
於為理運者雖非御舉狀
只有御免之由可被仰下
歟

更に候の旨に檢帳遣吏といはれ遠と檢校より使へし料
人と持たせりといふるに御免の旨に候はれ候はれ候はれ
わしに候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ候はれ

兼又新叙之

兼又新叙之

輩。巡年廻来
浴朝恩者。非
制限

一 鎌倉中之
僧徒恣諍官
位事

右依綱位乱

薦次之故。猥
求自由之昇
進。彌添僧綱
之真數

雖為宿老有
智高僧。被越
少年無才之

浴朝恩者非制限

新叙の位より後、巡年廻来の儀、
其の儀に依りて、君の恩と云ふは、
朝恩の位より後、巡年廻来の儀、
其の儀に依りて、君の恩と云ふは、

一 鎌倉中之僧徒恣諍官位事

鎌倉中之僧徒恣諍官位事
鎌倉中之僧徒恣諍官位事
鎌倉中之僧徒恣諍官位事

右依綱位乱

求自由之昇進
之真數

求自由之昇進之真數
求自由之昇進之真數
求自由之昇進之真數

求自由之昇進之真數
求自由之昇進之真數
求自由之昇進之真數

少年無才之
雖為宿老有智高僧被越

後輩即是且
傾衣鉢之資
且乖經教之
儀者也

自今以後不
蒙免許昇進
之輩為寺社
供僧者可被
停廢彼職也

雖為御歸依
僧同以可被
停止之

此外禪侶者
偏仰顧盼之
人宜有諷諫
之誠

一奴婢雜人

傾衣鉢之資且乖經教之儀者也

後輩即後進也。是且。傾衣鉢之資。即。且乖經教之儀者也。此等之輩。不可不察也。

自今以後不蒙免許昇進之輩為寺社供僧者可被停廢彼職也

自今以後。不蒙免許昇進之輩。為寺社供僧者。可被停廢彼職也。此等之輩。不可不察也。

雖為御歸依僧同以可被停止之

雖為御歸依僧。同以可被停止之。此等之輩。不可不察也。

此外禪侶者偏仰顧盼之人宜有諷諫之誠

此外禪侶者。偏仰顧盼之人。宜有諷諫之誠。此等之輩。不可不察也。

一奴婢雜人之輩

一奴婢雜人之輩。此等之輩。不可不察也。

之事

右任右大將
家御時之例
無其沙汰過
十箇年者不
論理非不及
改沙汰

次奴婢所生

之男女事

如法意者雖
有子細任同
御時之例男
者付父女者
可付母也

一百姓逃散

如とことし〜の婢にまじりて難人といふなり〜と云ふ

右任右大將家御時之例
無其沙汰過
十箇年者不
論理非不及
改沙汰

論理非不及改沙汰
論理非不及改沙汰
論理非不及改沙汰
論理非不及改沙汰
論理非不及改沙汰

次奴婢所生之男女事

如法意者雖有子細任同

御時之例男者付父女者可付母也

如法意者雖有子細任同
御時之例男者付父女者可付母也

一百姓逃散時稱逃散令

時稱逃毀令
損亡事

右諸國佳民
逃脫之時其
須主等稱逃
毀抑留妻子
奪取資財所
行之企甚背
仁政若被召

決之処有年
貢所當未濟
者可致其償
不然者早可
被亂返損物
但於去留者
宜任民意也

一稱當知行

損亡事

農民は臨時の課役をせらるる。百姓は臨時に
て逃散せられたる。逃散の婦女子あるをばかきつゝの民の
害也。一々いふと逃散と云ふ

右諸國佳民逃脫之時其須主等稱逃毀抑留妻子奪取資財所行之企甚背仁政若被召貢所當未濟之者可致其償不然者早可被亂返損物但於去留者宜任民意也

不於去留者宜任民意也

一稱為知行損亡事也

掠給他人所
領貪取所出
物事

右構無實掠
領事式目所
推難脫罪科
仍於押領物
者早可令糾
返至所領者
可被沒收也

無所領者可
被處遠流
次以當知行
所領無指次
申給安堵御
下文事若以
其次始致私
曲歟自今以
後可被停止

領貪取所出物事

知りてざるを所と案知りたるを據りその所賣るべきは
其所の所と合するを案は時代はくもあらずんば
領界はくたの地はく據らんも亦百姓あるべ
し

右構無實掠領事式目所
推難脫罪科仍於押領物
者早可令糾返至所領者
可被沒收也

他人の所領所と私領所とを據り無実とて人押領せしむる
或同の法と推しむれば其れはくもあらずんば
其人の所領と没収せしむる。知りたる所の所領せしむる

次以當知行所領無指次
申給安堵御下文事若以
其次始致私曲歟自今以
後可被停止

この事案はく知りたるを據りその所賣るべきは
其所の所と合するを案は時代はくもあらずんば
領界はくたの地はく據らんも亦百姓あるべ
し

一傍輩罪科
未斷以前競
望彼所帶吏

右積勞効之
輩企所望者
常習也而有
所犯之由令
風聞之時罪
狀未定之処
為望件之所

領欲申沈其
人之条所為
之旨敢非正
義

就彼申狀有
其沙汰者虎
口之謔言蜂
起不可絶狀
假使雖為理
運訴訟不被
叙用盡日之

一傍輩罪科未斷以前競
望彼所帶吏

右積勞効之輩企所望者
常習也而有其犯之由令
風聞之時罪狀未定之処
為望件之所領欲申沈其
人之条所為之旨敢非正
義

義

就彼申狀有
其沙汰者虎
口之謔言蜂
起不可絶狀
假使雖為理
運訴訟不被
叙用盡日之

叙用盡日之
假使雖為理
運訴訟不被

競望

一罪過之由披露時不被糾決改替所職事

右無糾決之儀有御成敗者不論犯否定貽鬱憤狀

者早究淵底可被禁斷

一取領得替時前司新司沙汰事

右於所當年貢者可為新司之成敗至

此と云て沙汰は虎の爪のごとく怖しき懲らざるの釋り起るごとく。いふ毒と云ふこと終べらざる。たとひ科と犯せるもいふたのこころし備はり申すに運の御成りなり。この一取領と申すは叙用いられまじき事なり。

一罪過之由披露時不被糾決改替所職事

右無糾決之儀有御成敗者不論犯否定貽鬱憤狀

此一取領の儀より御成敗ありて罪と犯や吾々の爲るに查照するごとく定めて替換と改まべし。さうば早く測るべきも此一究りて替換ありて

一取領得替時前司新司

沙汰

得替はつらりありしより一取領と申すはつらりありて。そのつらりありの沙汰と申すは替換と得替とをもちよめしづらりあることなり。新司は今のつらり

右於所當年貢者可為新司之成敗至

私物雜具并
 所從馬牛亦
 者新司不及
 抑雷况令與
 耻辱於前司
 者可被處別
 過怠也
 但依重科被
 沒收者非沙
 汰限

私物雜具并
 所從馬牛亦
 者新司不及
 抑雷况令與
 耻辱於前司
 者可被處別
 過怠也

但依重科被
 沒收者非沙
 汰限

但依重科被
 沒收者非沙
 汰限

一以不知行
 所領文書寄
 附他人事
 付以名主職不觸
 本所寄進權門
 事
 右自今以後

一以不知行
 所領文書寄
 附他人事
 付以名主職不觸
 本所寄進權門
 事
 右自今以後

於寄附之輩
者可被追却
其身也至請
取之人者可
被付寺社修
理

次以名主職
不令知本所
寄附權門事
自然在之如

然之族者名
主職可被
付地頭無地
頭之所者可
被付本所

一賣買所領
事

右以相傳之
私領要用之
時令沽却者

之被追却其身也至請
取之人者可被付寺社修
理

知りてはる所のまゝ物ごとを他人に寄附する事ありて是れ
てしるべし。後世に於て是れをてん下んとして承継する事あり
多し。然るに其の解とせしむる所の修治に於ては

次以名主職不令知本所
寄附權門事自然在之如
然之族者名主職可被
付地頭無地頭之所者可
被付本所

付地及無地改之如右
被付本所

地及無地を改むる所の事ありて是れ
知りてはる所のまゝ物ごとを他人に寄附する事ありて是れ
てしるべし。後世に於て是れをてん下んとして承継する事あり
多し。然るに其の解とせしむる所の修治に於ては

一賣買所領事

知りてはる所のまゝ物ごとを他人に寄附する事ありて是れ
てしるべし。後世に於て是れをてん下んとして承継する事あり
多し。然るに其の解とせしむる所の修治に於ては

右以相傳之私領要用之
時令沽却者

定法也而或
募勳功或依
勤身預別御
恩之輩恣令
賣買之条所
行之旨非無
其科自今以
後儘可被停
止也

募勳功或依勤身預別御
恩之輩恣令賣買之条所
行之旨非無其科自今以
後儘可被停止也

又此のりお傳へ来る新紙の必要あり付法部令
換手筆と毎どりの定法より或る事の勳功又
の勳功に依りて別よ加恩の知りて事恐よ其地
より此の料よりおわすは及後及傳せらるる
お傳の知りて事恐すこと若くは持田畠と惣
賣買もする同法とんくし後世に及てる事
式料として持札とやら一紙に
書取物と田畠と林と買取と
これら君より後世の知りて事恐すこと
叶はち此の事よりなり

若又背制符
令沽却者云
賣人云買人
共以可被處
罪科

若又背制符令沽却者云
賣人云買人共以可被處
罪科

一兩方證文
理非顯然時
擬遂對決事

一兩方證文理非顯然時
擬遂對決事

双方の証文の明白し不明なるは
双方の証文の明白し不明なるは
双方の証文の明白し不明なるは

右彼此證文
理非懸隔之
時雖不遂對
決直可有成
敗欤

一狼藉時不
知子細出向
其庭輩事

右於同意與
力之科者不
及子細至其
輕重者甚難
定式條尤可
依時宜欤

為聞實否不
知子細出向
其庭者不及

右彼此證文
理非懸隔之
時雖不遂對
決直可有成
敗欤

一狼藉時不知子細出向
其庭輩事

對決直可有成敗欤
其庭輩事

右於同意與力之科者不及子細至其輕重者甚難定式條尤可依時宜欤

為聞實否不知子細出向其庭者不及

罪科

一带問狀御

教書致狼藉

事

其科といふれあること。これとて。是と申したる。御問狀の御答に。お向ひの御答。

一带問狀御教書致狼藉

御人にて。お答と申す。之書と問狀と云。其の御答。より。御答の御答と申す。之書と問狀と云。是と申して。御人より。お答と申す。御答と申す。之書と云。

右就詐狀被
下問狀者定
例也。而以問
狀致狼藉事

右就詐狀被下問狀者定例也。而以問狀致狼藉事

新盤之企難
遁罪科。所申
為頭然之辟
更者。給問狀
事。一切可被
停止

新盤之企難。遁罪科。所申。為頭然之辟。更者。給問狀。事。一切可被。停止。

起請 御評
定問理 非決
断事

御評定問理狀。起請。御評。定問理。非決。断事。

起請 御評
定問理 非決
断事

起請 御評定問理狀。断事。

古愚暗之身。依了見之不
及若旨趣相
違事更非心
之所由。其外
或為入之方
人乍知道理
之旨。稱申無
理之由。又為
非據事。号有
證跡。為不顯
人之短。乍令

古愚暗之身依了見之不
及若旨趣相違事更非心
之所由其外或為入之方
人乍知道理之旨稱申無
理之由又為非據事号有
證跡為不顯人之短乍令

知子細付善
惡不申之者
意与事相違
後日之訛謬
出来欵凡評
定之間於理
非者不可有
親疎不可有
好惡只道理
所推心中之
存知不憚傍
輩不恐權門

知子細付善惡不申之者
意与事相違後日之訛謬
出来欵凡評定之間於理
非者不可有親疎不可有
好惡只道理所推心中之
存知不憚傍輩不恐權門

可出詞也御
成敗之事切
之條上。雖
不違道理一
同之憲法也
誤雖被行非
據一同之越
度也。自今以
後相向訴入
并其緣者自
身者雖存道
理傍輩之中

後相向訴入并其緣者自
身者雖存道理傍輩之中
其其緣者自
身者雖存道
理傍輩之中
其其緣者自
身者雖存道
理傍輩之中

以其人說致
違亂之由有
其間者已非
一味之義殆
貽諸人之嘲
者欬兼又依
無道理評定
之庭被弄置
之輩越訴之
時評定衆之
中被書与一
行者自餘之

討皆其乃之由獨似至及
之如志條之子細如式若
雖為一軍有曲折合遠紀
志
梵天帝釋四天王王摠日
本國中六十餘刻大小神
祇殊伊豆箱根兩所權現
三島大明神八幡太喜齋

計皆無道之
由獨似被存
之欤者條七
子細如此若
雖為一事存
曲折令違犯
者
先天帝釋四
大天王摠日
本國中六十
餘州大小神
祇殊伊豆箱

根而所權現
三島大明神
八幡大菩薩
天滿大自在
天神部類眷
屬神罰冥罰
各可罷蒙著
也仍起請如
件
貞永元年七
月十日

王滿大自在天神部類眷
屬神罰冥罰者可罷蒙著
也仍起請如件

貞永元年七月十日

齋庭長壽道沙弥 淨園

後庭 相摸上權藤葉時

大回 五番元三善康連

後庭 八幡少尉藤原朝長其孫

二階堂氏教美 沙弥 行出

長崎外記文美 教信三善長倫重

加賀守三善朝臣康長

所當隱後庭 沙弥 行西

前出親三善朝長家長

三浦 前親河古平親長義村

攝津守中原親長師直

北條 武藏守平親長義時

齋藤兵衛入

道 沙彌淨

圓

佐藤 相摸

大椽藤原

業時

太田 女番

九三善康

後藤 左衛

門少尉藤

原朝臣基

水條

相摸の年物長時局

起つて起つて法神と傳へ... 相摸の年物長時局... 此の... 又據れば... 又人の短とあらう...

綱

二階堂民部

大夫 沙彌

行狀

天野外記太

夫 散位三

善朝臣倫

重

加賀守三

善朝臣康

長

二階堂隱岐

法之... 後藤... 侍... 法人の... 後これ... 一と... 十... して...

入道 沙彌

行西

中條 前出

羽守藤原

朝臣家長

三浦 前駿

河守平朝

臣義村

攝津守中

原朝臣師

員

北條 武藏

入道 沙彌 氏那松兼信人の御後仁氏一本地子と云々

行西 氏那松兼信人の御後仁氏一本地子と云々

中條 前出 氏那松兼信人の御後仁氏一本地子と云々

羽守藤原 氏那松兼信人の御後仁氏一本地子と云々

朝臣家長 氏那松兼信人の御後仁氏一本地子と云々

三浦 前駿 氏那松兼信人の御後仁氏一本地子と云々

河守平朝 氏那松兼信人の御後仁氏一本地子と云々

臣義村 氏那松兼信人の御後仁氏一本地子と云々

攝津守中 氏那松兼信人の御後仁氏一本地子と云々

原朝臣師 氏那松兼信人の御後仁氏一本地子と云々

員 氏那松兼信人の御後仁氏一本地子と云々

北條 武藏 氏那松兼信人の御後仁氏一本地子と云々

守平朝臣

泰時

北條 相模

守平朝臣

時房

此書、迺萬

代不易法

也故加清

象黙以重

銀諸持矣

蓋為得丈

守平朝臣 三浦義村と始り平朝長義村とあり

泰時 三浦義村と始り平朝長義村とあり

北條 相模 三浦義村と始り平朝長義村とあり

守平朝臣 三浦義村と始り平朝長義村とあり

時房 三浦義村と始り平朝長義村とあり

此書、迺萬代不易法也故加清象黙以重銀諸持矣蓋為得丈

代不易法 三浦義村と始り平朝長義村とあり

也故加清 三浦義村と始り平朝長義村とあり

象黙以重 三浦義村と始り平朝長義村とあり

銀諸持矣 三浦義村と始り平朝長義村とあり

蓋為得丈 三浦義村と始り平朝長義村とあり


愚蒙輩易讀也易讀則通理速通理則犯法者稍少豈非師道小補乎柳師有先生村有夫子而時習之學日新予寧為之哉轉雅君子庶幾諒察正焉

成りては子存今の要物なりきり孫有り泰時又祀よ
 似ず賢明の君の心糸た代と業の心実よけ人の力と云
 相け我目と定りてけ法天个よめいり有り百好の
 る春平よりい由急及せも流りて児童も後の教
 てもあつることよりて於教よけりゆのうら詳解と云
 して虫肆の教よい教すと云

又改十年丁亥二月下旬 高井蘭心藏

嘉永二己酉年三月江戸須原屋茂兵衛之店ヨリ
 求之今月十八日 將軍家小金ヶ原ニテ
 御鹿狩有之

會津郡南山御藏入河原田智英



從四位下行太史兼筑紫轉主小槻宿祢伊治

玉巖堂藏收目錄

東都兩國 和泉屋金石衛門

○人皇八代
 後堀川院
 御宇將軍
 三位左中將
 源賴經公
 後見比條泰
 時時房貞
 永元三年七月
 玄米田允康
 連被仰合此
 式月ヲ法橋
 圓人王ニ書セ
 ラル泰時公
 評定眾十
 二人ヲ語ラヒ

悟窓漫筆 錦城太田先生著 全二冊
 先生平日隨筆劄記ノ書也古今治乱ノ
 本原ヲ推風俗ヲ隆保ル所ヲ論シ
 博々経傳子史ヲ引テレヲ証シ又學
 術ノ邪心ヲ辨シ天人ノ秘蘊ヲ漏ス實ニ
 天下有用ノ珍編ト云ヘシ

前後編 同ヒ 全一冊
 前編ニ漏レタル妙論ヲ載セ又經學詩文
 ノ流派ヲ辨別シテ其精確ヲ極ム前編ト
 同ク双壁ノ書ナリ

同二編 同ヒ 全二冊
 向者刊行ハル此書前後編四冊盛ニ世ニ
 行ハレテ今購ヒ人毎ニ繕テ古今ノ
 事理ヲ通曉ス今此篇ハ彼四冊ニ漏レタル奇
 事異説ヲ湊合シ全函ノ鴻寶トス

農家洞寶記 高井蘭心著 全三冊
 農家日用文章大全 同ト 一冊
 用文章の書教をまとめたもの書札等之類を
 出の返極法又の類或は華やかなる文辭ハ用流の
 推云といふよりいふ文章をいふは今日迄
 耕作農具村政の耕他の家も農用の文字
 以探り本中定式陸の諸用ハ文字
 辺去と云ふのいふも農家ニ登るは
 の洞宝といふとせし幼童教育便利なる
 法をまかり

專守政道私
ナク記録取
鐘ヲ釣テ新
人ニ撞マエテ
十五日仲ノ刻
ニ出申ノ刻ニ
歸ラシ鐘ヲ
聞シレバ人ヲ出
テ直ニ新ヲ聞
書訣ニ毎月
十日北日世日
ニ決断ヲ定
玉ヲ頭人評
定衆ヲ集メ
理非ヲ決セテ
其貞永式
月ノ如シ

文曆元三月五日天保時痛源十一歳御新ニテ元服アリ餘五身

経時ト号ス頼経公御加冠タリ同八月一日宇都下野ニ列司奉経女ヲ

室ノ家ト
ト玉ヒ
小侍所
別當田補
セラシ左
近將監
改メ
五フ

梧坡教諭

錦城先生附言
堯民先生著
世教勸成
意ヲ至トテ旁ラ故事古書ヲ
引テ証明シテ梧窓漫筆ニ類シテ又別ニ健
経ヲ開タル珍書ナリ

朱子家訓經典餘師

齊東野語
全一冊
此書、南宋の名儒朱熹先生平生子弟を以
て導く上、のまじく教訓せしむる人倫乃道と
入常の理と述べて流るる清風
氣と齊なる最の善く今も字に以て審
み解するに、上農工商の別を明かにし、
後を及ぶ理を會通して一家を尊ぶるは
子孫に及ぶるに基かり

笑戲自知録

伴田陳人著
全二冊
此書、心學不りとつゞいて、いハ半るは
否の秘術又ハ家産と車のいづくに
の傳へし法、又ハ天下の富をいづくに
載せし法、記して、時の輝映を傳ふる
也、白にまかり

除蝗録

大尾永常著
全一冊
此書、稻小虫の害と除く法を記し、
し、田畑のよく実生べれ教と多く記し、
たまは農家おとくに、一物とたると、
せむとまかり

野総苦話

常盤澤北著
全五冊
此書、おとら、徳川父子夫婦の法法、
の、
神徳傳の大論、
中、
折

秘傳寶記

此書、病犬毒虫、
法成、
補再、
珍

實語教童子教

頭書
無點
全一冊

古狀揃萬寶藏

無點
頭書
全一冊

實語教證註

全一冊

古狀揃講釋

全一冊

御成敗式目

無點大字
千巻付繪抄
各一冊

古狀揃證註

全一冊

御成敗式目證註

全一冊

今川童蒙解

全一冊

天保十年己亥仲冬

淺草茅町二丁目 須原屋 伊八
兩國吉川町 山田 佐助
神田鍛冶町 北鳥 順四郎
通二丁目 小林 新兵衛
麴町四丁目 角丸 屋基助

東都書林

東都書林
金七衛門藏板

